

曹寧柱先生を偲んで

仲條立一

曹寧柱先生が88歳で波瀾の生涯を閉ざされてより早くも今年は七回忌となります。江戸川区の国柱会を会場に同志、親族の方々と合同葬を催したのが昨日の事のように又、お亡くなりになる日の数日前迄、いつもの悠然としたお姿を我々の前に見せておられていた事を思い起こすと、気丈な先生の一挙一投足の仕種が脳裏に蘇ってきます。

先生は、戦前・戦中・戦後を通じて終始、朝鮮独立の為に一途にひた走って来られた。ご自分の回顧の言葉の中にあるように、昭和13年冬、当時舞鶴要塞司令官されていた「石原莞爾將軍」との初めての出会いにより、それ迄の独立運動の根底に潜んでいた思想を一擲し、石原莞爾先生の唱導される「民族協和・共存共栄」を旗印の東亜連盟の趣旨に共鳴し、新たな独立運動へと大転換される訳だが、この間の苦悩は曾て語られた。

「私は、東亜連盟を一番先に研究し、一番後に入会した。世紀の人、石原莞爾に会いながら、逡巡として裸になれなかった自分が恥ずかしかった。」

(新人物往来社肝石原莞爾のすべて P45)との言葉の中で汲み取れる。

その頃は時の軍閥に阿った興亜連盟とか何とか確固とした主義主張等これ一つ無く、時の権力は軍であり、その軍人に取り入って金儲けや、地位権力を得る手段としての集まりもあり、先生は「東亜連盟」をその類としてみるかどうか非常に迷われたのだと思う。

戦中、先生は東亜連盟運動の渦中に身を投じた故に辛酸極まる拷問と2年余りに及ぶ獄中生活をされ、戦後はこの体験を強靱なバネとされて東奔西走、一部伝説化された程の活躍をされたのである。

だが、それにも増して特筆すべき事は、道の師として石原莞爾先生のお側にお亡くなりになる。お仕えし、逝去後、石原主義普及の為、協和会、石原莞爾平和思想研究会の先達として後進の指導、育成に余念が無かった事は勿論、昭和63年石原莞爾先生の墓地の移転問題が発生した際、老躯を厭わず將軍墓地と顕彰碑の新規建立の為、地元同志を始め全国の心ある有志との話し合い、旧墓地をお守りする桐谷家との折衝等と必死に取り組みされたのである。平成5年10月31日、丸々5年の歳月と数多くの困難を経て念願の墓所は、石原將軍終焉の地西山の旧墓地と対面するかのよう、バイパスを挟んだ見晴らしのよい丘に建立され、先生を導師として竣工記念式典を挙げる事が出来た。

以上が言葉足らずであるが東亜連盟・石原主義に殉じた先生の行動の要約である。